

H24 シカ年度 個体数モニタリング事業結果

1-1. ヘリコプターセンサス（環境省事業）

2011年に調査が実施された知床半島広域の41調査区画のうち、2013年現在でシカの密度操作が実施されている3地区を含む10区画（図1-5-2）において、2011年と同様の手法によるシカのヘリコプターセンサスを実施した。調査実施日は2013年2月20～21日であった。その結果、標高300m以下の7調査区において計157群679頭を発見した。

また、知床岬先端部の仕切り柵内（台地上草原）においては、従来セスナ機で実施してきた、低空を複数回旋回する手法による航空カウント調査を2月20日にヘリコプターで実施し、計56頭を確認した。上空から撮影した写真を分析した結果、オス成獣が31頭（55.4%）以上を占めていた。

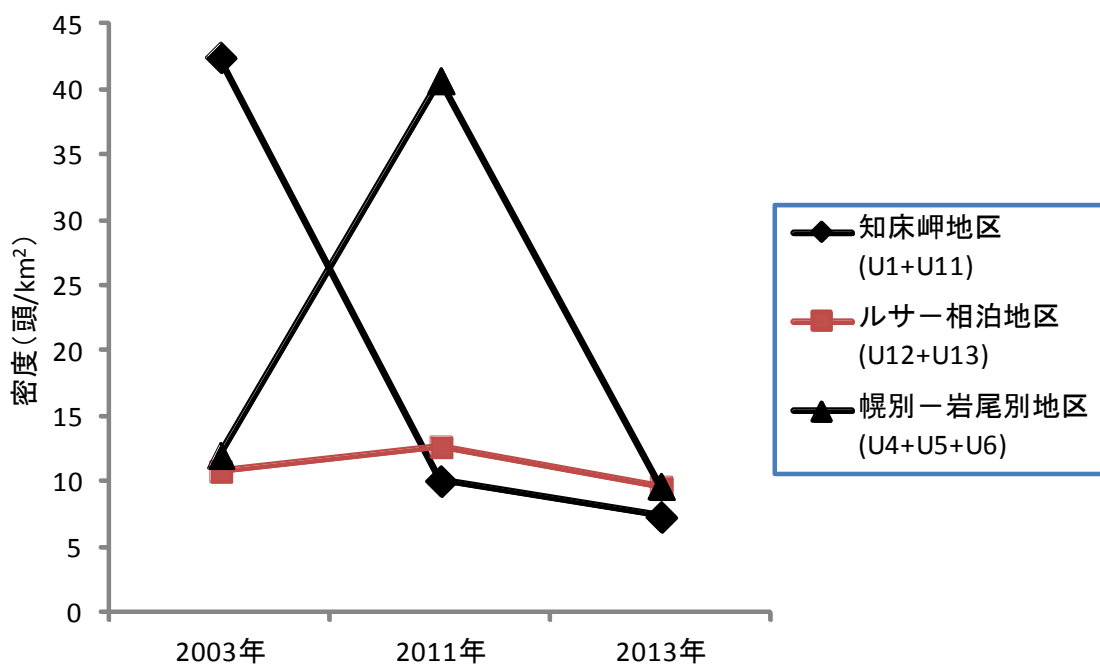


図 1-5-1. 各地区（広域）におけるヘリセンサスによる発見密度の変化

<ルサー相泊地区>

- U12 (約 9.95 km², モイレウシ～相泊温泉南) においては、2003 年 3 月の 152 頭が 2011 年 2 月に 176 頭に増加した後、2013 年 2 月には 94 頭 (9.45 頭/km²) へと減少。
- U13 (約 12.43 km², セセキ～ルサ川河口) においては、2003 年 3 月の 90 頭から、2011 年 2 月には 108 頭、2013 年 2 月には 121 頭 (9.73 頭/km²) へと微増。
- 2012 年末まで捕獲圧がほとんど加わっていなかった U12 で減少し、3 ヶ年捕獲を続けてきた U13 で増加するという矛盾する結果となった。
- U12 のシカについては、U13 など付近の他のヘリセン調査区への流出が起きた可能性や、2012 年春に自然死が多発した可能性などが考えられる。
※U13 付近では、海岸沿いの低標高地に限らず、内陸の標高 300～500 m 地点でもシカが越冬している (ただしヘリ調査で得られた結果ではなく、2012 年の地上からの目視記録および後述する 2013 年の GPS 首輪装着個体のデータ)。

<幌別～岩尾別地区>

- 知床五湖から幌別川までの約 8 km の海岸線に沿った台地上 (U4 南端+U5+U6:約 20 km²) で確認されたシカの数、2011 年 2 月の約 1200 頭から、4 分の 1 以下の約 270 頭へ大きく減少した。この数値は 2003 年 3 月の約 350 頭をも下回っている。
- ※U4 (約 11.45 km², ポンプタ川～知床五湖)、U5 (約 11.54 km², 岩尾別)、U6 (約 9.51 km², 幌別)。

- シカの多くは海食台地縁のササ地を利用しており、道路から確認できる位置での発見は一部に限られた。

<知床岬地区>

- U1 と U11 における発見頭数の合計は、2011 年 206 頭に対し、2013 年は 150 頭であり、56 頭の減。
※知床岬先端から両側約 10 km のエリアであり、個体数調整の実施範囲よりもかなり広い。
- 知床岬先端部の台地上草原 (仕切柵内) では 56 頭が確認された。その後 32 頭が捕獲されていることから、越冬期の生息頭数は、単純計算で残り 24 頭。

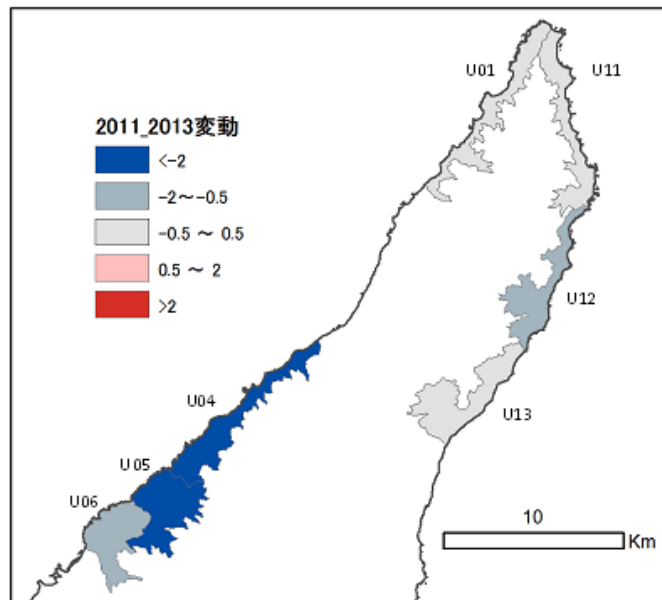
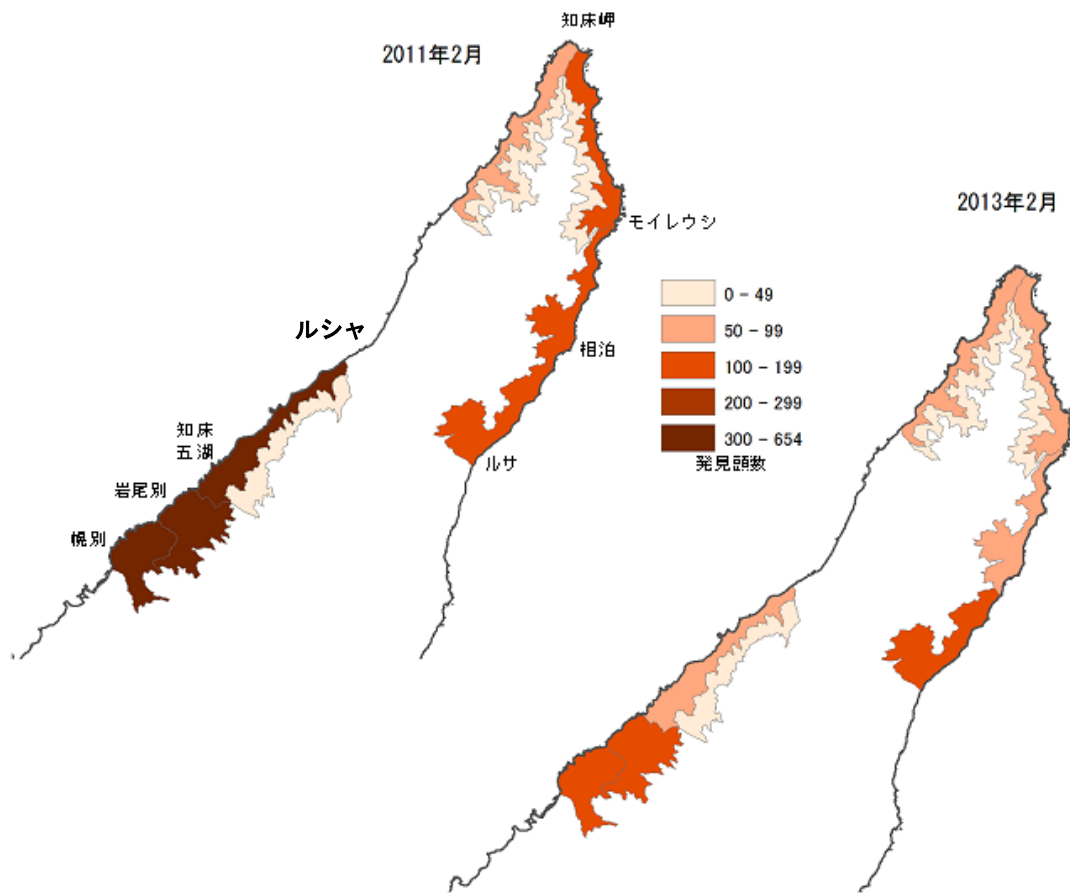


図 1-5-2. 2011 年 2 月および 2013 年 2 月に実施したヘリコプターセンサスによる発見数（上）
および増減傾向の比較（下）.

2011 年報告に倣い、変動 = (2013 年発見数 - 2011 年発見数) / t 検定標準偏差 とした。

1-2. スポットライトセンサス（羅臼町事業・斜里町事業）

<ルサー相泊地区>

- ・2009年以降、春と秋に各時期5日間集中で、道路沿いの10.2 km 区間においてライトセンサスが行われている。
- ・今春は4/23～5/9の5日間に調査を実施した結果、発見頭数135頭、密度指標値13.2頭/km、100メス比7.4であった（いずれの数値も5回分の平均値）。発見頭数の最大値は189頭。

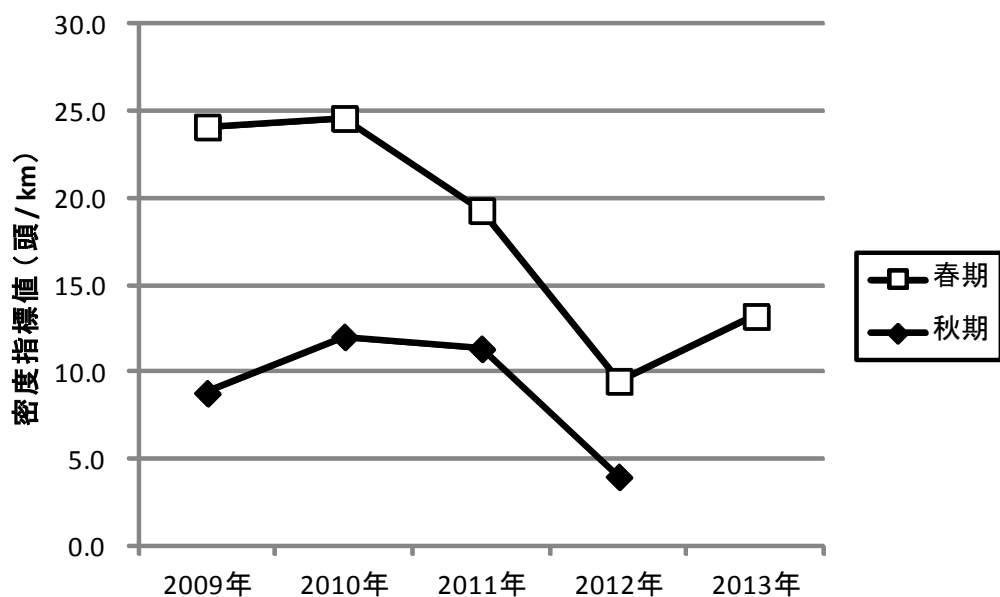


図 1-5-3. ルサー相泊地区のライトセンサス結果（H20～24 シカ年度，各5回分の平均値）

※実際の発見頭数は密度指標値の10.2倍

- ・調査区間の後半（昆布浜～相泊）における発見数が多かった。

※同地区ではH21（2009）シカ年度からエゾシカの試験的捕獲（捕獲手法検討調査）が開始され、密度操作実験に移行したH24シカ年度分も合わせて、計413頭がこれまでに捕獲されている。

<幌別-岩尾別地区>

- 1980年代から春と秋に継続して複数回のライトセンサスが行われている。
- 2012年春は前年同期比で幌別が半減、岩尾別が8割減であったが、2013年春は幌別8.2頭/km（100メス比4.1）、岩尾別4.8頭/km（100メス比1.0）と共に増加し、特に岩尾別では強度の捕獲圧（H24シカ年度冬期349頭）に反してシカの発見頭数が増加するという、矛盾した結果が得られた。
- この原因としては、今春の異常気象とそれに伴う調査実施時期の遅延、シカの採食場所の変化などが考えられる。春の調査は例年4月下旬～5月上旬に行われているが、今春は季節外れの大量積雪と天候不良で調査の延期が続いたため、調査開始が4/26、調査終了が5/18であった（2012年は4/25～5/1）。
- 岩尾別におけるシカの発見場所（≡採食場所）は、調査区間前半の岩尾別川沿いに集中していた。
- 調査初日（4/26）には、岩尾別が1.1頭/kmと少なめの結果であったことから、例年どおり5月上旬までに調査を完了していれば、異なる結果が得られた可能性がある。

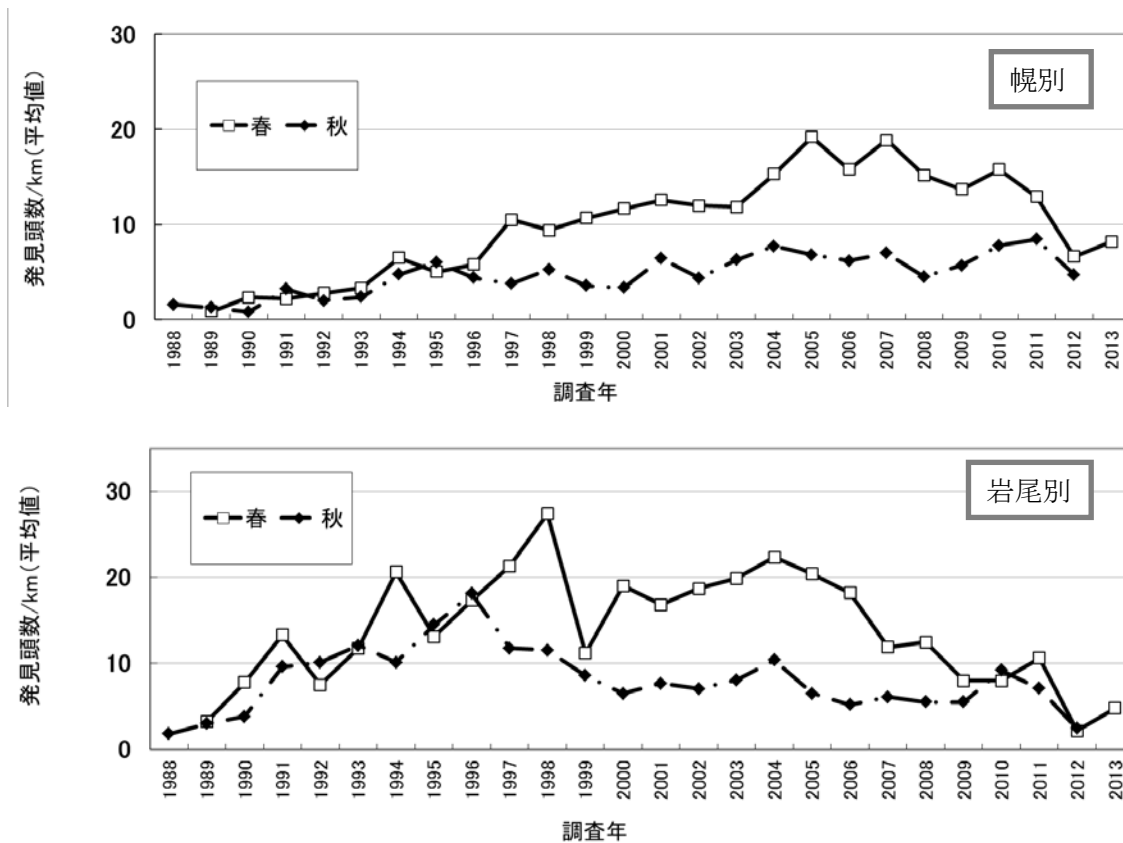


図 1-5-4. 幌別-岩尾別地区のライトセンサス結果（春 1989～2013, 秋 1988～2012）

参考) GPS 首輪装着個体の行動圏調査 (知床財団独自調査事業, 未発表の速報データ)

- ・ルサー相泊地区で2頭、幌別-岩尾別地区で2頭の計4頭のメス成獣を、2012年12月~2013年1月に麻酔銃で生体捕獲し、GPS首輪を装着して放獣し、越冬期の行動圏の把握を試みた。

<ルサー相泊地区>

- ・熊岩付近にいた個体が、2/21~3/15にはトッカリムイ岳付近の標高300~450mエリアに滞在した。その後は再び海岸沿いの熊岩付近に戻った。
- ・北西の季節風の風下にあたるルサー相泊地区では、海岸沿いの南東向き急斜面に吹きだまった雪は気温の低い厳冬期には融解しにくいいため、シカが斜面下部でササ等を採食することは困難。そのため、シカは北西の強風が当たって積雪量が少ない場所(ルサー相泊の場合は若干標高の高い場所)に移動している可能性あり。
- ・従来のヘリセンサスでは、U13に隣接する高標高域(調査区設定なし)で越冬しているシカ群を見落としていた可能性あり。
- ・各年の積雪量にもよるが、同地区における流し猟式SSは、12~1月または海岸沿いにシカが集まる3月中旬以降が実施適期と考えられる。

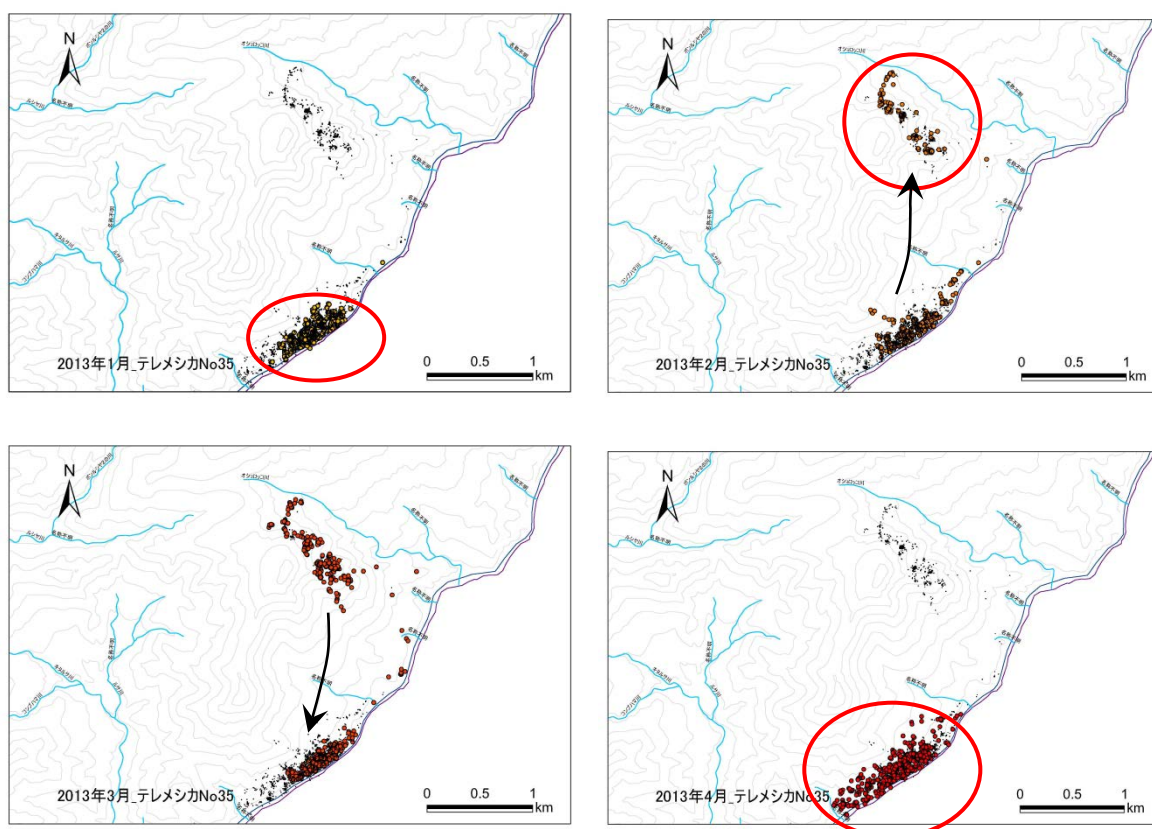


図1-5-5. ルサー相泊地区で生体捕獲したメス成獣(#35)の2013年1~4月の行動圏

<幌別-岩尾別地区>

- ・1月には知床五湖に近い通称「絶景」付近の狭い範囲（1 km²未満）で行動していた個体が、2～3月には除雪された道道（流し猟式 SS 実施区間）などを移動経路に利用し、岩尾別台地中央部の海側も行動圏に含むようになった。4月には海岸沿いに岩尾別川河口付近に移動し、さらに4月中旬以降は岩尾別川沿いに上流方向へ移動した。

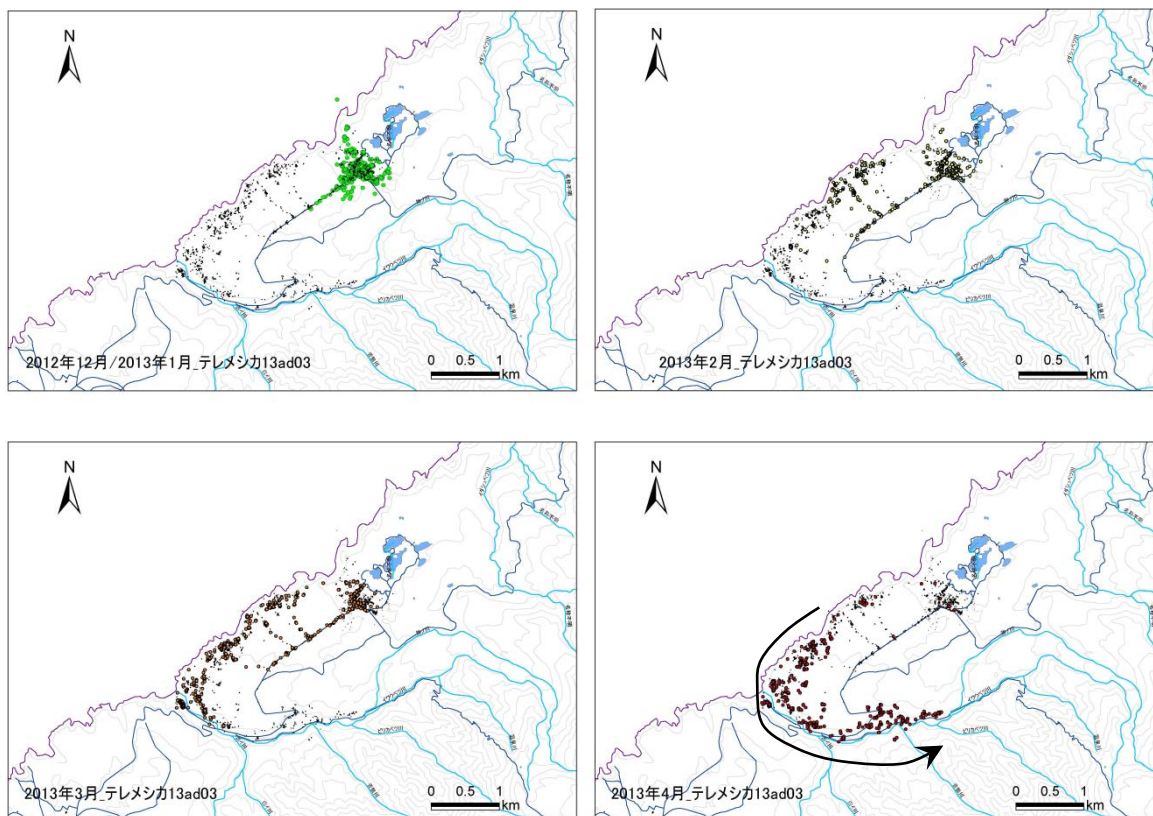


図 1-5-6. 岩尾別地区で生体捕獲したメス成獣（13AD03）の2013年1～4月の行動圏

- ・道道沿いの流し猟式 SS や岩尾別川河口の囲いわなでは捕獲が困難な、岩尾別台地の海側辺縁（断崖上）もシカに利用されている。
- ・上記の従来手法による捕獲が困難なエリアで越冬していた個体や、岩尾別川河口の囲いわなで3月末の捕獲終了時点で獲り残されていた個体（約60頭）が、4月中旬以降、13AD03のように岩尾別川沿いに移動し、ライトセンサスの結果に影響を与えた可能性がある。